

書評

山田 昌弘 (1999) 『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房

田中 重人

東北大学文学部 年生 (日本語教育学研究室) 学籍番号 xxxxxxxx

1 この本の概要

1.1 パラサイト・シングルとは

「パラサイト・シングル」とは、「学卒後もなお、親と同居し、基礎的生活条件を親に依存している未婚者」(本書11ページ)をいう。「パラサイト」(parasite)とは英語で「寄生」を意味する。寄生虫とおなじように宿主(=両親)から養分(=基礎的生活をささえる物質的条件)を補給しながら生活を楽しんでいる親同居未婚者のことだ。このパラサイト・シングルたちの行動や意識に焦点をあてて、現代日本社会がおちいつている閉塞状況を解説するのがこの本の主要なテーマである。

1.2 パラサイト・シングル社会の特徴

パラサイト・シングル層をまず特徴づけるのは、生活の豊かさである。日常的な衣食住を同居親にささえてもらっているから、自分のかせぎは付加的消費すなわちレジャー支出、豪華な外食、ブランド品などにまわすことができる。パラサイト・シングルが付加的消費にむけるエネルギーが、近年のヒット商品をうみだしている(42ページ)。

一方で、パラサイト・シングルの増大は基礎的な消費をおちこませる。家を出ないで結婚もしない若者が増えると、住宅・家電製品・耐久消費財などの基礎的消費がおさえられる。付加的な贅沢品需要による「パラサイト消費」が脚光をあびる影で、基礎的需要の伸び悩みがじわじわと日本経済をむしばんでいるという(96ページ)。

また、若者の生活水準の二極分化が進む。若者自身の収入格差はそれほどないにもかかわらず、親の経済的利用性が高い若者は豊かな生活を享受し、そうでない若者はあくせく生活に追われるという格差がうまれている。これは自分の努力次第で報酬が決まるという業績主義の理想の崩壊を意味する。このことは若者の努力目標をうばい、依存主義を蔓延させる結果をもたらす(124ページ)。

そしてもちろんパラサイト・シングルの増大は、結婚をめぐる状況をかえていく。親と同居してリッチに暮らす若者の生活水準は、結婚してあたらしい所帯をかまえた

たんに低下してしまう。パラサイト・シングルにとって結婚というのはあまり魅力のない選択肢なのだ。最近の急激な未婚化・少子化の主要因はパラサイト・シングルの結婚難だというのが著者の見立てである (80 ページ)。

1.3 日本はなぜパラサイト・シングル社会になったのか

読者はおそらく、パラサイト・シングルはどうして現代の日本社会で出現したのか、という疑問を持たれるだろう。この疑問にこたえる部分 (5, 6 章) は近代家族論を研究してきた著者の面目躍如たるところなので、ぜひ原文を読んでいただきたいのだが、かいつまんでいえばつぎのようなことである。

近代社会は「子供のために」という規範をつくりだした。子供をよりよく育てることが親のつとめだという意識、いわば「子供中心主義」がひろがったのである。ただし先んじて近代化をすすめた英米北欧ではプロテスタントの教義に影響されて自立を尊ぶ規範が強く、子供中心主義を中和していた。そこでは親が無限定に子供の面倒をみつづけるのではなく、子供を早く独立させて自分の力で生きていけるようにしつけるのが理想とされていた。これに対して自立規範の比較的弱い日本社会では、子供が親から独立することはさほど強く要求されない。むしろ子供に苦労させまいと親が長期間サポートする傾向のほうが強い。この基盤的条件に、寿命の伸び、経済成長をなしとげたことによる経済的余裕、晩婚化、若者の消費欲求の増大、若者の賃金を抑える日本的雇用慣行、若者の大都市流入が一段落したことなどの条件があわさって、1970 年代以降にパラサイト・シングル層が出現する。

1.4 著者の提言

著者はパラサイト・シングルにきびしい目をむけている。現在の日本社会を停滞させ、不公平をうみだし、将来を暗くしている元凶だとみているのである。そこで若者を親からひきはなし、自立して生活できるようにする政策が必要だと訴える。著者によれば、現在の経済環境にいちばん適合的なのは、夫婦共働きで家事・育児を分担しあってそこそこの生活をするライフ・スタイルであり、そのような暮らしがたが可能になるように政策や雇用慣行をかえるべきだということになる。

2 この本への評価

この本の魅力は、従来の研究が見落とししてきた死角に斬り込んだあたらしさにあるだろう。反面、厳密な論証という点ではつめが甘い。

2.1 数量データの信頼性の問題：パラサイト・シングル的人口規模は？

わたしがいちばん気になったのは、いったいパラサイト・シングルは何人いるのかということだ。本のなかでは1000万人という数字がしばしば顔を出す。だがこれは単に親と同居している未婚者を数えあげたときの人数であり、全員が親に寄生できるわけではない(57ページ)。親同居未婚者中のパラサイト・シングル率を推しはかるデータとしては、個室を持つ者が9割、家事のほとんどを親にまかせている者が8割という数字があがっている。これに月10万円以上の小遣いをつかえる者が4割程度というデータをあわせると、基礎的生活を完全に親に依存していて高額消費が可能なだけの経済的余裕のある者の率は $0.9 \times 0.8 \times 0.4 = 0.288$ すなわち3割弱と推定できる(36~40ページ)。とすると親同居未婚者1000万人のうちでパラサイト・シングルといえるのはせいぜい300万人程度ではないか。それだってたしかに相当な人口規模ではあるけれども。

数量面でのこうしたつめの甘さがこの本の読後感を規定しているように思う。たしかに現代社会の一面をすどく切りとった興味深い内容であり、問題提起の書としては一級のものである。だがその一方で、この本にはなにかしら誇大宣伝の気配がただよっている。統計データをきちんと処理してパラサイト・シングル問題の数量的ファクターを確定していくのは、これからの仕事なのだろう。

2.2 まとめ

これまで社会科学の世界では、成人した子供はまず親から独立して単身生活をし、結婚してはじめて「世帯」をもつ、という現実ばなれしたモデルがはばをきかせてきた。親同居未婚者の統計的な把握がおくれてきたのは、そうした学界の状況による。パラサイト・シングルの出現は1970年代のことだということから、20年以上おくれてやっと学問が現実においついたところである。パラサイト・シングル層をめぐる問題の存在があきらかになったいま、その問題はどれほど深刻なものなのか、またそれに対する政策にどれほどの効果を期待できるのか、といった疑問にこたえる実証研究が進展することを期待したい。